知床財団がお届けする 知床の自然情報誌SEEDS（シーズ）
公益財団法人 知床財団　発行日 2019年10月18日

SEEDS

知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

No.243
2019 / 秋号

活動レポート
羅臼で暮らし、ヒグマと生きる

自然特集
シダの世界へ

今津秀邦　いのちのフレーム第３回

知床・人・インタビュー第 39 回
あかしのぶこさん

スタッフの本棚 第 26 回
旅をする木

知床財団購買部
知床財団 × フェールラーベン

活動レポート

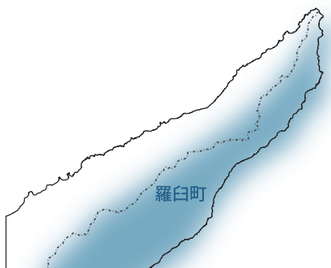
羅臼で暮らし、ヒグマと生きる

文ー小川洋平　羅臼地区事業部

羅臼という町

羅臼町は、オホーツク海に突き出た知床半島の東側半分を占めています。約50キロにわたり海岸線沿いに住宅地が点在し、家のすぐ裏はヒグマの生息する森があり、人の生活圏とヒグマが生息域が隣接しています。また、豊かな知床の海を基盤とする漁業の町で、水産加工業も盛んに行われています。日本三大昆布の一つにも数えられている羅臼昆布の産地でもあり、漁の時期になると海岸の石浜一面に昆布を干している風景が見られます。

そんな羅臼町が面積の約半分を占める知床半島は、世界有数のヒグマ高密度地域として知られています。そのため、羅臼町は毎年約２００件ものヒグマ目撃情報が寄せられます。



ヒグマが出没すると？

羅臼町の住民がヒグマを目撃したり痕跡を発見すると、まず羅臼町役場に通報が入ります。通報の内容は様々で、「今、〇〇さんの家の裏でヒグマが草を食べている」「コッコ（子グマ）を連れたヒグマが道路を歩いている」といった急を要するものや「昨日ウチの番屋の前の海岸をヒグマが歩いていた」「玄関前にクマの糞みたいなものがあるから確認して欲しい」といったものまであります。

通報を受けると、役場職員と知床財団職員で現地に急行して状況を確認し、ヒグマに対してどのような対応を取るのか判断します。その際の判断は、２０１７年４月に改訂された「知床半島ヒグマ管理計画（※）」に則って行われています。人に害が及ぶ可能性が低いと判断されると、花火弾やゴム弾を使って山へとヒグマを追い払います。しかし、状況によっては有害捕獲と判断されることもあり、その場合は猟友会と連携して対応にあたります。ヒグマは昼夜問わず目撃されるため、ヒグマ対策に関わる人員は24時間体制で対応にあたっています。

住宅地の庭先に出没したヒグマ.
決して珍しい光景ではない.

ヒグマに壊されたゴミ箱.

「出没＝捕殺」から辿った羅臼のクマ対策の変遷

文・田澤道広　羅臼地区事業部長

1996年までのクマ対策は、いわゆる「出没＝捕殺」という対応を行ってきました。この方向性が大きく変わり始めたきっかけは、羅臼町に「環境管理課 自然保護係」が新設され、クマ対策を含める自然環境保全と野生鳥獣の保護と管理が一元化されたことでした。

当時非常に参考になったのが、斜里町で先進的に実施されていた「非致死的対策」で、現在も継続されている「追い払い」や「クマが近づかない環境づくり」などを少しずつ手さぐりで進めていきました。しかし当時は銃を持っているのはハンター（地元猟友会員）だけであり、「追い払うだけなら帰る！」と言われて、対策現場からハンターに去られたこともありましたし、こちらが制止しても現場でクマを射殺されてしまったこともありました。

そんな状況の中でも、銃を持たなくてもできる対策を進めるために、人家周辺の草刈りなどを通じて、住民の意識づくりを地道に進めていきました。時には駆除一辺倒の考えしかない人たちを説き伏せたり、半分ケンカになりかけたりしながら、町内でクマ対策をしていました。

ほどなく役場職員として現場に出ていた私が銃を持つことにはなりましたが、それはそれで、夜も早朝も休日もクマの通報があれば24時間駆けつけなければならず、日々気の休まらない状況でした。

2006年に斜里町が設立した知床財団に羅臼町も参画し、翌2007年には現場対応やデータ収集などを知床財団に業務委託しました。現在では斜里・羅臼と自治体は違っても、知床財団を通じてクマ対策を含む自然環境の保全管理の実働部隊は一体化され、統一的な対応が行われるようになりました。

※知床半島ヒグマ管理計画：世界遺産地域を管理している知床世界自然遺産地域管理計画の付属計画。計画対象地域はヒグマの広い行動範囲を考慮して斜里町、羅臼町、標津町3町の全域。

赤いラインが電気柵の設置されている場所

（左）羅臼市街地中心部. 学校や住宅を取り囲むように電気柵が設置されている
（上）先端部の北浜地区. 海岸線の道路と山の境界線に沿って電気柵を設置している

庭先のネットに絡まって死んだエゾシカを回収するスタッフ. そのまま放置しておくとヒグマが餌付くため、早急に除去する必要がある.

ヤブに潜むヒグマを探すスタッフ. ヤブはヒグマが身を潜めるには絶好の場所となる.

クマ対策とは「出没してから」ではない

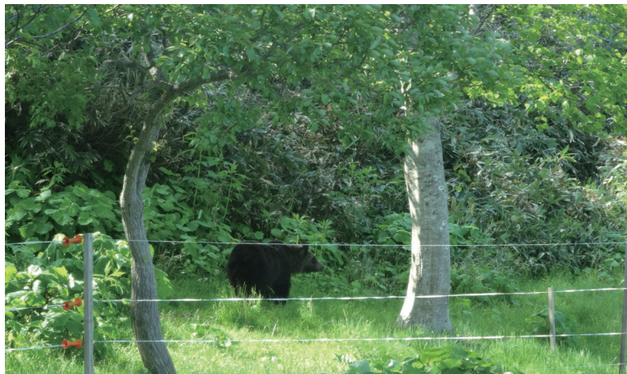
ヒグマが出没してから対応しても100％安全と言える手法は限られています。人とヒグマの軋轢を減らすためには、出没する前に人の生活圏にヒグマを侵入させないようにする事前対策がとても重要です。

そこで、私たちが行っていることの一つに、**電気柵によるクマ対策**があります。電気柵とは、軽い電気ショックで動物を驚かし、心理的な境界線を作りヒグマの侵入を防ぐための柵です。羅臼町では、その電気柵をダイキン工業株式会社からのご支援を受けて、市街地や町の北側を中心に海岸線の道路山側に設置しています。また、最近では水産加工場においても電気柵の普及が進んでいます。（左ページ上部写真）

羅臼町に点在している水産加工場では、魚の加工時に出されるアラや内臓等の廃棄物にヒグマが誘引され、加工場が荒らされる被害が毎年のように発生していました。電気柵を張り巡らせたくてもメンテナンスに労力が掛かることもあり、効果的な運用が難しく、被害を完全に無くすことはできていませんでした。そこで、加工場と協力し、電気柵をローコストで効果的に運用する方法なども試行しはじめ、少しずつですが加工場への電気柵導入が普及しています。

またもう一つの予防的な対策として有効なのが**草刈り**です。町内ではいたるところに高さ2mほどにもなるアキタブキやオオイタドリ、クマイザサなどが繁茂しており、ヒグマが身を隠す場や移動の場、餌場として好んで利用します。このようなヤブを刈り払うだけでもヒグマの侵入を防ぐことにつながり、立派なクマ対策となるのです。

（左）水産加工場に設置された電気柵　（右）電気柵の山側に姿を現したヒグマ
草や物が触れると漏電して電圧が下がってしまうので、定期的な草刈りなど細やかなメンテナンスが欠かせない



このように、人とヒグマの軋轢を減らすために、出没を抑える予防的対策にも力を入れています。

私たちが目指す町づくり

近年ヒグマと人との距離がますます縮まってきたと思われる事例が増えてきました。もはや知床財団スタッフ、役場職員、猟友会員というクマ対策人員だけで対策にあたるやり方は限界にきています。これからは、町全体でヒグマ対策に取り組み、ひとりひとりがヒグマの存在を感じながらも一定の距離を置いてヒグマと生活できる町づくりを目指すことが重要です。

その第一歩として、この夏羅臼町民と一緒に行えるクマ対策イベントを企画・実施しました。クマ対策といっても、ヒグマの追い払いや有害捕獲等といった直接的な対応ではなく、先述の予防的な対策である草刈りです。草刈りは一年を通して付き合わなければいけない作業ですが、クマ対策には効果的なことなのでこの先町の恒例事業として根付いていけばと思います。

また、草刈りの他にも町民が行えるクマ対策として、電気柵の一般家庭への普及を行っています。電気柵は決して安いものではないため、まずは要望のあった家庭に一定期間電気柵をレンタルし、設置やメンテナンスなどは一緒に行いながら、電気柵の効果を実感してもらうことから始めています。このような対策を展開していくことで、「魚の城下町」としてだけではなく、「**ヒグマと上手に付き合う町**」という世界に誇れる町になると信じています。

羅臼町内の電気柵設置やメンテナンス、およびクマ対策のための草刈り事業はダイキン工業株式会社様のご支援に支えられています。

DAIKIN

町民と一緒に実施した草刈り（2019年7月6日）

出没したクマの対応にあたる知床財団スタッフと役場職員